

令和2年度 農業農村工学会 資源循環研究部会 木質バイオマス及び炭化に関するオンラインセミナー 開催報告

1. 開催経緯

資源循環研究部会(部会長 凌祥之九州大学大学院農学研究院教授)では、全国大会開催地の地元で活動されているバイオマスに関わる研究者、行政機関や企業の担当者に、企画セッションでの講演を依頼して、地域の特色あるバイオマス利活用システムについての情報の収集や交換を行ってきた。

鹿児島大会においても、“ご当地”講演者として鹿児島大学¹⁾、鹿児島市下水道局²⁾及び(株)源麴研究所(霧島市)³⁾に発表を依頼していた。しかし、鹿児島大会がコロナ感染拡大防止のため Web 開催に変更されたことから、学会外部の自治体や企業の担当者に急な Web 講演対応を依頼するのは負担が大きいと判断し、企画セッションは中止した。

一方で、鹿児島県では県内木材生産量が拡大し温室効果ガスの排出削減を推進しているなど興味深い点が多く、企画セッションで講演を依頼した鹿児島大学農学部寺岡行雄教授に改めて講演を依頼し、部会独自のオンラインセミナーを開催することとした。また、木質バイオマスに関連する話題として、温暖化対策として炭素貯留への期待が高まっている「炭化」をオンラインセミナーのテーマに加えた。

2. セミナーの概要

オンラインセミナーは 8 月 28 日に開催した。演題等の次第は、表 1 の通りである。なお、オンライン会議ソフトは、部会事務局の所属機関が推奨している Microsoft Teams を使用した。また、セミナーの実施中、部会事務局 3 名は 1 室に詰め、事務局内のセミナー運用上の意思疎通は口頭で行った。

表1 セミナーの次第

開会・司会進行	折立文子(農研機構農村工学部門)
開催趣旨説明	山岡 賢(農研機構農村工学部門)
講演 1「炭化をめぐる最近の話題」	
	凌 祥之(九州大学大学院教授)
講演 2「鹿児島における木質バイオマスの利活用」	
	寺岡行雄(鹿児島大学農学部教授)
閉会あいさつ	凌 祥之(九州大学大学院教授)

凌教授の講演では、温室効果ガス(GHG)の排出・吸収量の考え方を示した IPCC の 2019 年「方法論報告書(MR)」にバイオ炭に関する記載が追加されたこと⁴⁾が紹介され、バイオ炭活用による農地炭素貯留に向けての研究展望等が報告された。

寺岡教授の講演では、鹿児島県内の森林資源・林業、木質エネルギーの利用等の状況が紹介された。また、県内森林整備による二酸化炭素吸収量をクレジットとして販売していること⁵⁾、クレジット購入を県発注の農業農村整備事業等の公共事業の参加の要件とすることで、クレジットの販売量が増加したことが報告された。

両講演者とも、資源循環や GHG 排出削減の活動が農林業分野に「お金」が確実に落ちる仕組みの必要性を指摘した。

オンラインセミナーは、部会として初めての取り組みで、各種トラブル発生の不安があり、部会メーリングリストのみで参加を案内し、申込者は10名であった。セミナーでは、音声のハウリングがときどき発生したが、大きなトラブルは生じなかった。移動中の車内からの参加や部会員の紹介による学生の参加があり、オンライン化によって部会活動への参加が容易となることが感じられた。

今回のオンラインセミナーの開催は、コロナ問題のためにやむを得ず取り組んだが、今後、部会活動の手段の1つとしてオンラインセミナーを活用していきたい。

引用文献

- 1) 寺岡行雄: 鹿児島における木質バイオマスの利活用, 2020年度農業農村工学会大会講演会講演要旨集, pp.711-712(2020)
- 2) 吉鶴麗瑩: 鹿児島市の汚泥発酵肥料への取り組み, 2020年度農業農村工学会大会講演会講演要旨集, pp.713-714(2020)
- 3) 山元正博: 薩摩中央飼料協同組合における焼酎廃液の飼料化実例紹介, 2020年度農業農村工学会大会講演会講演要旨集, pp.709-710(2020)
- 4) 環境省: IPCC 2019年方法論報告書の概要, <https://www.env.go.jp/press/files/jp/111522.pdf> (参照 2020年8月30日)
- 5) 鹿児島県: かごしまエコファンド制度について, <http://www.pref.kagoshima.jp/ad02/kurashi-kankyo/kankyo/ondanka/nintei/kagoshima-ecofund.html> (参照 2020年8月30日)